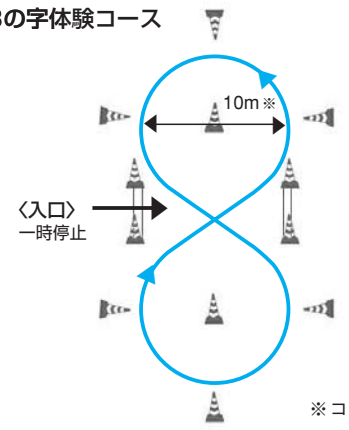
STREAM
交通安全教育の潮流

全国に拡がるHondaの高校生交通安全教育活動　連載：第1回

道徳心を育み、安全意識を向上させる自転車教育

三重県立川越高等学校での「8の字走行体験」。下図のような8の字コースを20台の自転車で走行。8の字の交差する箇所ではお互いの動きをよく観て譲り合うことが必要になる

●8の字体験コース



※コースの直径は基本が8mで、人数によって変更する場合あり

ホンダは平成24年度から熊本県で行政機関や教育機関と連携し、県内の高校で高校生交通安全教育活動を実施している。そして、平成25年度は同活動の全国展開を開始した。指導を担当するのは、栃木、埼玉、浜松、鈴鹿、熊本にあるホンダの製作所内に設置された地区普及ブロックである。当コーナーでは、今号から全国の各高校で行われる交通安全教育活動を紹介していく予定である。

譲り合うことの大切さに気づいてもらう

ホンダの高校生交通安全教育活動の目的は、交通社会人の第一歩となる高校生に対し、交通安全を学ぶ機会を通して、人への痛みや人への思いやりを感じられる豊かな人間性を育み、交通ルールや社会のルールを遵守してもらうことで事故防止につなげることである。今回は全国各地で行われているホンダ独自の自転車教育を紹介する。

三重県では、鈴鹿普及ブロックが4月15日、三重県立川越高等学校の2年生を対象に実施。2年生320名が2グループに分かれ、座学と実技を交互に受講した。

座学では、インストラクターが交通事故の加害者となってしまった場合の賠償責任について、実際に起きた事故事例を挙げながら解説。さらに、ホンダの危険※予測トレーニングDVDを使って、自転車乗用中に出会う様々な危険場面を見せ、どのように対応すれば事故を防げるか生徒に考えてもらう。

座学では高校生の自転車加害事故の事例とその賠償額について説明

実技は「8の字走行体験」と「飛び出し体験」。「8の字走行体験」は、校庭に設けられた8の字コースを自転車で走行する。各々が単独で走るのではなく、1台ずつ順々にコース内に入っていく。コース内を20台で走行できたら終了だが、その途中で1台でも停止したら、全員がコースの外に出て最初からやり直しとなる。最初は15台くらい入ったところで、誰かが止まってしまう。そこで、インストラクターが「どうすれば20台でスムーズに走行できるか」生徒同士で話し合う時間をつくる。他の自転車の動きに注意し、思いやりをもって譲り合うことの大切さに気づいてもらうことがねらいである。

「8の字走行体験」の途中、お互いがスムーズに走行するためにはどのような行動をとるべきか、インストラクターが生徒に問いかける

同校生徒指導部主任の柳川一朗教諭は「当校では9割以上の生徒が通学に自転車を利用しており、毎年新学期に近隣の警察署や自動車教習所による交通安全講話を実施していました。そうした講話とはまた違う視点で指導ができるのではないかと考え、ホンダの交通安全教育を取り入れることにしました。生徒が興味を持って学べる内容だったと思います」と語る。なお、川越高校においては同じ内容の交通安全教育を4月23日と5月8日にも、それぞれ1年生、3年生を対象に行った。

脇見運転の危険を体験してもらう

4月18日には兵庫県の伊丹市立伊丹高等学校で1年生280名を対象に実施し、川越高校と同じように鈴鹿普及ブロックが「8の字走行体験」と「飛び出し体験」を行った。

「飛び出し体験」では最初、生徒に携帯電話の画面を見ながら、自転車を運転してもらう。停止しているクルマを通り過ぎる時に、クルマのカゲに隠れているインストラクターがぬいぐるみを投げる。生徒は脇見をしているため、ぬいぐるみ（危険）の発見が遅れ、すぐにブレーキをかけることができない。その後、脇見をせずに同じ場所を通過してもらう。今度は、しっかり前方に注意を向けているので、安全に停止できる。こうした体験を通じて、脇見運転がいかに危険な行為であるか、生徒一人ひとりに実感してもらう。体験した生徒からは「つい携帯電話を見てしまうことがあります。でも、何かあった時に止まることができないことがわかったので、これからは気をつけたいと思います」という声が聞かれた。

同校生徒指導部長の山田大介教諭は「以前から実技による自転車教育をやってみたいと考えていたところ、ホンダの交通安全教育のことを知り、協力をお願いしました。自転車を利用していて、歩行者やクルマに迷惑をかけていることを自覚していない生徒もいるはずです。生徒にとっては、そうした自分の運転を見つめ直す機会になったと思います。自分と他者の安全を確保するためには、思いやりが必要なことを実感できたはずです」という。

伊丹市立伊丹高校でも「8の字走行体験」が行われた

伊丹市立伊丹高校での「飛び出し体験」。携帯電話を見ていると、インストラクターの投げたぬいぐるみに気づくのが遅れてしまう

脇見をせずに運転すれば、急な飛び出しがあっても対応できることを生徒一人ひとりが体験

歩行者や他の自転車を意識してもらう

福島県では、栃木普及ブロックが5月16日、福島県立福島南高等学校で実施。同校生徒指導部の江尻栄久教諭は「当校では生徒の約3分の2が通学に自転車を利用しています。また、高校入学後に初めて自転車通学を経験する生徒も少なくありません。そこで、ホンダの協力を得て、1年生201名を対象に自転車教育を行うことにしました。参加体験型の自転車教育は初めての試みです」と開催の背景を話す。

この日の実技プログラムは「歩道走行」と「反応回避」。「歩道走行」は、歩道では歩行者優先の意識や譲り合いの気持ちが大切であることに気づいてもらうのが目的である。模擬の自転車通行可の歩道を走行し、歩行者に見立てたパイロンの脇を通過する時は徐行してもらう。また、反対側から自転車が来た場合はどちらか一方が停止し、道を譲る。インストラクターは「歩道で自転車と行き違う時は歩行者に十分注意して、速度を落とし左側に避けましょう」と思いやり教育の一環としてアドバイスした。

「反応回避」は、両手に旗を持つ担任の先生に向かって自転車を走らせ、先生が上げた旗とは逆方向に回避するというもの。旗（危険）を認知、判断し、正しく操作するには時間がかかるため、とっさの際には自分が思うように回避できないことを生徒に実感してもらう。

江尻教諭は「思いやり、譲り合いの気持ちを育むことは、交通ルールやマナーを守ることにつながっていくと思います」と、交通安全教室の感想を語った。

ホンダの高校生交通安全教育活動は、事故を防止する上で他の交通参加者への思いやりの気持ちが大切であることに気づいてもらうための教育である。そうした点が今回紹介した3つの高校でも評価されているといえる。

福島県立福島南高等学校での「歩道走行」。自転車通行可の歩道を走る時の歩行者への配慮を身につける。自転車が行き違う時はお互いに声をかけ合うようにインストラクターがアドバイス

「反応回避」では先生が上げた旗とは逆方向に回避してもらう

※危険予測トレーニングDVD＝詳しくは以下のホームページを参照。http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/training/